

## マライ・ポリネシア語族におけるブリ語 (ハルマヘラ島) の系統

崎 山 理\*

### **Linguistic Position of Bulinese (South Halmahera) in the Malayo-Polynesian Languages**

by

Osamu SAKIYAMA

Although the languages of South Halmahera in Indonesia have usually been classified into the South-Halmahera-West New Guinea group of the Indonesian languages, it was not based on the reliable comparative investigation. For the purpose of determining the genealogical relationship of these languages, by comparing Bulinese, whose Wordlist (1940) and Grammar (1951) were published by the missionary Maan, with Dempwolff's reconstructed Proto-Austronesian phonemes (1938), the author is come to a conclusion that Bulinese is a 《langue à double couche》 in which the Polynesian elements form the substratum on which the Indonesian elements superimposed. Considering Dempwolff's suggestion that the Polynesian languages differ from the others in point of the unification of Proto-Austronesian *l* and *ʔ* with *d* and *ɖ*, the Polynesian elements in Bulinese come out as follows: \**lima* > *lim* "five", \**ʔabu* "fringe" > *lapo* "hem", \**dəŋəŋ* > *loŋa* "to hear", \**ɖaləm* > *lolo* "interior". But on the one side: *laŋit* > *laŋit* "sky", *lamay* > *rame* "to be lively", *dagaŋ* "foreign merchant" > *dagan* "to trade", \**ɖayun* > *dau* "to row". It is evident that the latter phonemic changes prove the new Indonesian elements.

On the grammatical phenomenon as well, especially on the usage of possessive pronouns, Bulinese seems to maintain the Polynesian feature. Though in Bulinese there exist three types of possessive pronouns, two of them are made by personal morphemes + genitive particles *ni* and *na*: *yanik* 'eba'i "my house", *yanak piŋe* "my rice". Such construction as uses genitive particles would not be observed either in the Indonesian languages or in the Melanesian languages. These *ni* and *na* seem to be equivalent to the Polynesian genitive particles *o* and *a* from the point of view of its function.

Probably being affected also by the so called non-Austronesian languages of North Halmahera, Bulinese has been formed through such interactions between the above-mentioned two languages.

---

\* 大阪外国語大学インドネシア語学科

## は　じ　め　に

インドネシアで行なわれる言語は、公用語であるインドネシア語 (Bahasa Indonesia) のほかに、「言語」と「方言」との差をどこに置くかによって若干の変動があるけれども、およそ150ないし200あるといわれる。<sup>1)</sup> それらの言語は互いの間の相違が大きく、例えばジャワ島に限って見ても、そこで用いられるジャワ・スンダ・マドゥラの各言語はそのどれか一つを知っていれば、他が直ちに理解できるというわけにはゆかない。ゆえに、インドネシアには元来、われわれが用いるような、多少の訛はあるけれども相互理解が全くできないわけではないという意味での「方言」という言葉は存在せず、インドネシア語に対する各地域ごとの言語は「地方語」(bahasa daerah) という名称が当てられている。(もちろん、インドネシア語の *dialek* は西洋語からの借用語である。) インドネシア語の研究のみならず、これら地方語の調査・研究はオランダ統治時代を通じて大きい成果が上げられた。そして地方語のうちでも、スマトラ、ジャワ・マドゥラ、ボルネオ、セレベスの各地域ごとの言語については、オランダの王立言語地理民族学研究所から Bibliographical Series の一環として出版された研究解説文献目録集によって、われわれはいちおうの今日までの研究結果、または研究段階を知ることができる。<sup>2)</sup> これら諸言語は、比較言語学的にすべてがマライ・ポリネシア語族のインドネシア語派に属することについても、系統論上全く問題は起こらない。(ただし、スマトラのアチェ語は例外とすべきかもしれない。系統的にモン・クメール語族との疑い得ない重層語的關係があるようである。)<sup>3)</sup> しかし同じくインドネシア国内にありながらモルッカス諸島に行なわれる言語については、その調査・研究が一段と遅れているのみならず、また言語の系統上の帰属の問題についても比較言語学的に明らかにされていないものが多い。例えば Indopazifischer Raum における語族・語群についての Salzner による詳しい系統的分布地図があるが<sup>4)</sup>、この地図は一見緻密・精細に作り上げられている反面において、比較言語学的な根拠・裏付けのない部分も多く種々の疑いとすべき点も含んでいるのであり、また、このモルッカス諸島の最北に位置するハルマヘラ島の言語に関しても同様の問題が存在する。

1) *Ensiklopedia Indonesia*. 1954(?). Bandung/'s-Gravenhage. Indonesia の項目による。

2) Voorhoeve, P. 1955. *Critical Survey of Studies on the Languages of Sumatra*. 's-Gravenhage; Uhlenbeck, E. M. 1964. *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*. 's-Gravenhage; Cense, A. A., Uhlenbeck, E. M. 1958. *Critical Survey of Studies on the Languages of Borneo*. 's-Gravenhage; Noorduyn, J. 近刊 *A Bibliographical Survey of the Languages of Celebes*. 's-Gravenhage.

3) Cowan, H. K. J. 1948. "Aanteekeningen betreffende de verhouding van het Atjèhsch tot de Mon-Khmer-talen," *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde (BKI と略)*, Deel 104, pp. 429-514.

4) Salzner, R. 1960. *Sprachenatlas des Indopazifischen Raumes*. Wiesbaden. なお、詳細な書評は、泉井久之助 1962. 『言語研究』第41号, pp. 82-87. にある。

## I ハルマヘラ島のブリ語

ハルマヘラ島およびその沿岸に散在する小島を含むハルマヘラ地方の言語状態は、いささか複雑な様相を呈している。ハルマヘラ北部の諸言語についてそれがパプア語と同系であることは既に言われているが<sup>5)</sup>、Meillet/Cohen の言語地図でもハルマヘラは南北に別たれ<sup>6)</sup>、その根拠はその本文中にも示されていないけれども、北部の言語はニューギニア（イリアン）のパプア語と同系の孤立語とされ、南部の言語はインドネシア語派に属するとなっている。先の Salzner は、やはりこのような二分法によっているが<sup>7)</sup>、北部は北ハルマヘラ諸語として全く孤立的に扱い、一方、南部の言語はインドネシア語派内の西ニューギニア語群と結び合わせて南ハルマヘラ・西ニューギニア語群をなすとし、これに属する言語がインドネシア語派からオセアニア語派への過渡的言語であるとみなす点で異なる。しかしその根拠は示していない。

北部に属するとされる言語のうち、Isam, Tolikulu, Galela, Loda, Tobelo, Madole, Tabaru, Waioli, Ibu, Ternate, Tidore の各語について Hueting による 250 の語彙対照表によれば<sup>8)</sup>、それら各語の間の著しい類似を指摘することができ、またその間の音韻対応関係を見出すのも困難ではないが、マライ・ポリネシア語族の中には位置付け得ないことは明らかである。これらの言語に対して Cowan<sup>9)</sup> はパプア語(特に西ニューギニアの)との関係を説いたが、Salzner の分類はこの説とも全く相反している。<sup>10)</sup>

さて、Meillet/Cohen によってインドネシア語派に属するとされ、Salzner は西ニューギニア語群の一部をなすとした南部の主な言語には、Buli, Wajamli (Jawanli), Maba, Bitjoli (Ingli), Patani, Sawai, Weda (Were), Gani (Gane), Makian, Kajoa などがある。この中でやや詳しくまとまった報告・記述があるのは Buli 語のみであって<sup>11)</sup>、その他についてはす

5) Schmidt, W. 1926. *Die Sprachfamilien und Sprachenkreise der Erde*. Heidelberg. pp. 152-154.  
Kieckers, E. 1931. *Die Sprachstämme der Erde, mit einer Anzahl grammatischer Skizzen*. Heidelberg. p. 130.

6) Meillet, A., Cohen, M. 1952. *Les langues du monde*. Paris. pp. 730-731.

7) Salzner, p. 19, p. 33.

8) Hueting, A. 1908. "Iets over de Ternataansch-Halmahërasche taalgroep," *BKI*, 7e volgr. dl. 6, pp. 370-411. その他、北ハルマヘラの言語資料として断片的ではあるが、Robidé, P. J. B. C. 1872. "Vluchtige opmerkingen over de talen der Halmahera-groep," *BKI*, 3e volgr. dl. 7, pp. 267-273; Kern, H. 1893. "Woordverwisseling in het Galelareesch," *BKI*, 5e volgr. dl. 8, pp. 120-128. を見る事ができた。

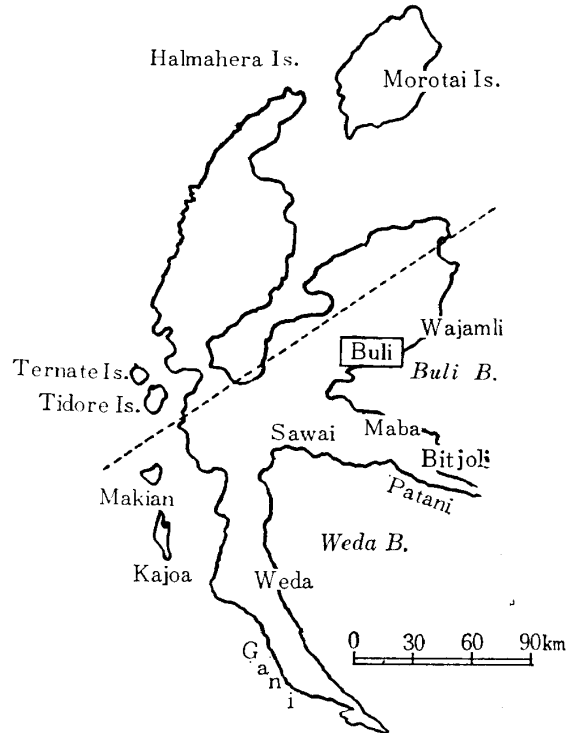
9) Cowan, H. K. J. 1957-1958. "A Large Papuan Language Phylum in West New Guinea," *Oceania*, Vol. 28, pp. 159-166.

10) ただし、Esser, S. J. 1938. *Atlas van Tropisch Nederland*. Amsterdam. の言語地図に画かれた分類をそのまま踏襲している可能性はある。なお、Uhlenbeck, E. M. 1967. "Indonesia and Malaysia," *Current Trends in Linguistics*, Vol. II, p. 872. 参照。

11) Maan, G. 1940. *Boelisch-Nederlandsche Woordenlijst met Nederlandsch-Boelisch Register*. Verhandelingen van het Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen, Deel LXXIV. Bandung.; \_\_\_\_\_. 1951. *Proeve van een Bulische spraakkunst*. Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde. Deel X. 's-Gravenhage.

べて断片的な記録があるにすぎない。<sup>12)</sup> 要するにモルッカス諸島の言語の研究は、このハルマヘラ島に限って見ても未開拓の分野が大きく残されているのである。

ブリ語については、1965年1月、ハルマヘラ島東部のモロタイ島に私が滞在中、間接的にはあるが、実際の資料をも若干得ることができた。本稿では、上に述べたようにいまだ比較言語学的な帰属関係の証明ができていないモルッカス諸島の言語のうち、特にブリ語についてマライ・ポリネシア諸語との関連におけるその系統問題を、ブリ語の言語的性格を明らかにしつつ、音韻・文法にわたって考察しようとするのである。（モロタイ島では、インフォーマントの関係上、サンギル語の調査が主となり、ブリ語については直接調べることはできなかった。モロタイ島はオランダ統治時代以前は無人島であって、現在の住民はそれ以降の、主としてアンボン島、サンギル島、タラウド島、ハルマヘラ島からの移民である。しかしハルマヘラ島からの移民は非常に少ない。Salzner の分布地図



ハルマヘラ島南部言語分布図

ではモロタイ島全体を北ハルマヘラ語域内に含めてしまっているが、これは誤りであり、モロタイ島では上記の移民達の言語——ハルマヘラ移民の言語を除いて、他は明瞭にインドネシア語派的特徴を示す——しか行なわれていない。）

ブリ語はハルマヘラ島南部のブリ湾北岸沿で話され、その使用者数は1000人前後であるとされる。<sup>13)</sup> 奇妙なことに Salzner の分類においては、ブリ語がハルマヘラの北部・南部の両言語に現われる。<sup>14)</sup> このような大きなミスは、彼が分類を行なうに際して言語の比較によるのではなく、単に機械的にカードを整理したために起こったのではあるまいか。ブリ語についての資料は先の Maan<sup>10)</sup>, Cambier<sup>11)</sup> によるもののほか、Huetting<sup>8)</sup> にも北ハルマヘラ諸語に対して参考

12) Cambier, J. P. C. 1872. "Rapport over Tidoreesch Halmahera," *BKI*, 3e volgr. dl. 7. pp. 265-266. には 43 の語彙について南ハルマヘラの六つの言語—Maba, Gotowassi, Buli, Wajamli, Bitjoli (Ingli)—の対照表が掲げられている。またその表記法に信頼が置けないけれども, Wallace, A. R. 1922. *The Malay Archipelago*. (New ed.) London. pp. 464-493. に付録として載せられた各地域の言語の中で、北ハルマヘラの Ternate, Tidore, Sahu'u, Galela, 南ハルマヘラの Kajoa, Gani の例を見ることができる。なお、私は見るを得なかったが、Makian 語については、インドネシア語で書かれた次の論文がある。Ali Mahmud Abd. Rahim/Amra. 1958. "Sedikit tentang bahasa Tahani dipulau Makian," *Medan Bahasa*, Vol. 8, pt. 4, pp. 27-32, \_\_\_\_\_ . 1960. "Seni Dontji dipulau Makian," *Bahasa dan Budaya*, Vol. 9, pp. 238-46.

13) Maan (1951), p. 5.

14) Salzner, p. 19, p. 33.

的につけられた若干の語彙がある。Maan の二つの詳しい報告によってブリ語の姿は、あらかじめ知らることができるけれども、彼みずからは何ら比較言語学的に的確な知識を持った人でなかったことは、その系統説についても Salzner の説に見られたように、ニューギニアの言語と密接な関係にありインドネシア語派からメラネシア語派への過渡的言語と見る従来の説に従い<sup>15)</sup>、またその語彙集に示された不十分な語原の指示においても知られる（彼はハルマヘラにおいてユトレヒト伝導団派遣の宣教師であった。彼の残した業績に限界があったこともやむを得ないであろう）。

ブリ語の綴字法には、特に決まったものがあるわけではない。Maan の語彙集はオランダ語の綴字法に従った——インドネシア語の旧綴字に等しい——方式が取られているが、本稿では音素表記を採用し、特に、ブリ・インドネシア語の *tj*, *dj*, *nj*, *ng*, *j* と綴られるものはそれぞれ /č/ [tʃ], /j/ [dʒ], /n'/ [ɲ], /ŋ/ [ŋ], /y/ [j], また母音については *a*, *e*, *é*, *i*, *o*, *u* と綴られるものを /a, ə, e, i, o, u/ とするほか、ブリ語には ə 以外のそれぞれの母音に長母音があるからそれらを /a'a, o'o……/ [a', o'……] とする。/'/ は柔らかい声立て《weiche Vokal-Einsatz》であって、母音が語頭に来る場合はその前に、二重母音の場合はその間に立つ。

## II ブリ語の音韻現象

ブリ語の語彙を一瞥するならば、そこに見られる語形・音韻のみをもってあたかもインドネシア語に近い一言語であるかのように速断することは容易である。かつて Raffles はカウイ語（古代ジャワ語）の中の多くのサンスクリット語彙のみを見て、カウイ語をサンスクリットの崩れた一言語であるとみなしたが<sup>16)</sup>、誤り方の点では同じ類に属するものといえよう。ブリ語の子音音素は次の19個が認められるが<sup>17)</sup>、インドネシア語と全く同じ語彙をもってこのすべての音素を満たすこともできる。（例において起原の明らかなサンスクリット、アラビア語からの借用語については、S, A と記す。）

p : payuŋ 〈傘〉; lupa 〈忘れる〉; čap 〈印〉<sup>しるし</sup>

b : buŋa 〈花〉; sabar (A) 〈忍耐〉

m : mačam 〈種類〉; 'umur (A) 〈年齢〉; talam 〈盆〉

t : taŋis 〈泣く〉; 'untuŋ 〈幸運〉; surat (A) 〈手紙〉, 'adat 〈慣習〉

d : (pa-)damar(-a) 〈松明〉, danda (S) 〈罰金〉; badan 〈体〉

n : naga (S) 〈龍〉, ni'at (A) 〈意図〉; sopan 〈礼儀正しい〉, sawan 〈てんかん〉

č [tʃ] : čoba 〈試みる〉; lon'čeŋ 〈鈴〉

15) Maan (1951), p. 5.

16) Raffles, T. S. 1817. *The History of Java*, Vol. I. London. p. 367.

17) Maan (1951), pp. 14-16.

j[dʒ] : jaga 〈見守る〉, jala (S) 〈投網〉; kaʒaŋ 〈蓆〉

n'[ɲ] : n'an'i 〈歌う〉, n'awa 〈魂〉

k : kota 〈町〉, karonʒ 〈袋〉; belok 〈針路を変える〉

g : gula 〈砂糖〉, guwa (S) 〈洞穴〉; lagu 〈歌〉

ŋ : suŋa'i 〈川〉; pelaŋ 〈鯨〉, piriŋ 〈皿〉

f : fakat (A) 〈協議する〉, ta'ufan 〈台風〉

h : hal (A) 〈事柄〉; rahmat (A) 〈慈悲〉

s : sapi 〈牛〉; bəsi 〈鉄〉; balas 〈返す〉, lu'as 〈広い〉, tulis 〈書く〉

r : rame 〈繁華な〉, rugi (S) 〈損害〉, rupa (S) 〈姿〉; (namo)dara 〈鳩〉, diri 〈自身〉; pintar 〈賢い〉, 'umur (A) 〈年齢〉

l : laraŋ 〈禁ずる〉, laŋit 〈天〉; lilin 〈蠟〉, 'alam (A) 〈世界〉, gali 〈掘る〉

w : waktu (A) 〈時〉; sewa 〈賃貸(借)〉

y[j] : yuta (S) 〈百万〉; bahaya (S) 〈危険〉

これらはインドネシア語の語彙と全く同じ語形・音韻をしている。このような例はまだほかにも多い。しかしブリ語の個々の音韻の発現を、さらに広くマライ・ポリネシア語族に含まれる他の言語との音韻対応関係において調べてゆく時、その現在見られる音韻体系は少なくとも複数の言語層の音韻が反映されてでき上がっているものであり、以上の例は、たとえブリ語の全音韻を含むものであるにせよ、後次的にインドネシア（マライ）語が表層語（superstratum）としておおいにさったところの新しい姿を示しているに過ぎないことが明らかになる。

ブリ語の根幹には、インドネシア語（派）的では決してない他の言語の姿がある。世の多くの言語と同様に、ブリ語も単純・単層的な言語ではない。

なお、ハルマヘラ島は、既に古く、島民間の交易語であったインドネシア（マライ）語の勢力を強く受けたことが考えられ<sup>18)</sup>、また、歴史的に比較的新しいところでは、16世紀、香料諸島としてのこの島々がスペイン・ポルトガルの政争の地となった。<sup>19)</sup> ブリ語はそのようなインドネシア語の影響を漸次受けるとともに<sup>20)</sup>、スペイン・ポルトガル語からのブリ語独自の借用

18) 時期的には新しいが、マライ語としては古い資料である書簡が Ternate 島で発見されている。

Blagden, C. O. 1930-2. "Two Malay Letters from Ternate in Moluccas, written in 1521 and 1522," *Bulletin of the School of Oriental Studies*, Vol. 6, pp. 87-101.

また、マガリャンイス（マゼラン）に随行したピガフェッタがモルーカ島（現在のハルマヘラ諸島）で1521年採録した語彙はマライ語である。Bausani, A. 1960. "The first Italian-Malay Vocabulary by Antonio Pigafetta," *East and West*, New Series Vol. 11, pp. 229-248.

19) 林屋、野々山、長南、増田等訳注 1965. 『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン航海の記録』大航海時代叢書 I, 東京, pp. 601-632; 生田、池上、加藤、長岡等訳注 1966. 『トメ・ピレス東方諸国記』大航海時代叢書 V, 東京, pp. 355-365.

20) 先の例の中のサンスクリット・アラビア語彙は、その語形から見てもいったんインドネシア語となったものが伝えられたと考えられる。ただし、サンスクリットは紀元前後、アラビア語は10世紀前後にはインドネシアにもたらされていたことは確実だけれども、ブリ語のインドネシア語の語彙的要素（つづく）

語をも持っている。kastara <とうもろこし>, sintu <帯>, tända <店>, 'oras <時間> など。また、13—15世紀にかけてのジャワのマヂャパヒット王国の領土はこの地にも及んだ。ジャワ語からの若干の借用語もある。dadi <成る>, pekan <市場>, kiya'i <長老に対する敬称>。

### Ⅲ ブリ語の音韻対応形式

ブリ語の個々の音韻の発現の仕方を、マライ・ポリネシア諸言語から比較言語学的に再構された共通祖語の音韻と引き合わせると、事情はやや複雑である。<sup>21)</sup> 例えばマライ・ポリネシア語 (MP) 再構形 \*bət'i' <鉄> はブリ語 (Bl.) bəsi であり、MP \*batu' <石> は Bl. pa'at である。このように MP \*b に対して Bl. は b と p の二様に現われるように見える。ゆえに、Bl. のこの二面性を解決するために、MP においてきわめて特徴的な前鼻音化現象を考慮に入れて、MP \*mb > Bl. b, MP \*b > Bl. p (すなわち、MP \*mbət'i' > Bl. bəsi, MP \*batu' > Bl. pa'at) とすれば説明は一見簡単につくかのである。そして語中の場合も同様に、\*təbu' <甘蔗> > top, t'əmbah <敬意> > suba となってこの解釈が正しいかのごとくに見える。また \*p の場合も \*mpək'ah <粉碎する> > pəs, \*pitu' <7> > fit となって \*mp > p, \*p > f も可能のように思える。しかし Bl. 'arap <望む>, selap <切り倒す> の語末の -p に対して MP \*'alamp <取る>, \*t'alamp <落下する> に由来すると解釈してよいであろうか。しかしこれは不可能である。

(VI 1, 4 参照)

それは前鼻音化現象《Pränasalierung》の持つ本来的な性質にかかわっている。前鼻音化現象とは MP において一般的・共通的に見られる現象であって、次の 12 種類の破裂音（閉鎖音）・破擦音が語頭に立つ場合、それらの音と同器官的《homorganisch》な鼻音をそれらの前に現出せしめるのである。<sup>22)</sup>

\*b ~ \*mb, \*p ~ \*mp; \*d ~ \*nd, \*t ~ \*nt; \*d' ~ \*nd', \*t' ~ \*nt';  
\*g' ~ \*ŋg', \*k' ~ \*ŋk'; \*g ~ \*ŋg, \*k ~ \*ŋk.

この現象は、MP の個々の言語において、具体的に鼻音代償《Nasaler Ersatz》また鼻音増加《Nasaler Zuwachs》となって現われ、例えばインドネシア語では čambut <鞭> に対して mənčambuk <鞭打つ> のごとく č- の前に鼻音を増加せしめ、あるいは səmpit <狭い> に対し

(脚注 20 つづき)

にはそのような時期的な漸次性がある。なお、サンスクリットの一部は分裂以前の共通祖語に既に外来語としてはいていた。Priyohutomo. 1953. *Sedjarah Kebudayaan Indonesia*. Djakarta/Groningen. p. 17; Salam, S. 1964. *Sedjarah Islam di Djawa*. Djakarta pp. 23-25; 泉井久之助 1942. 「南方語の系統」『南方講座』, 京都, pp. 70-71.

21) マライ・ポリネシア共通祖語の再構形は、Dempwolff, O. 1938. *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. III Band. Berlin/Hamburg. による。ただし、彼の再構形のすべてが、すなわち共通祖語の語根であったわけではない。さらに根元的なより小さい語根に分析できる場合が多い。

22) Dempwolff, O. 1934. *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. I Band. Berlin/Hamburg. pp. 30-34; 1937, II Band. pp. 7-12.

て *mən'əmpit* 〈狭くなる〉のように *s-* は鼻音によって代償させられるのである。しかしこの現象は、現在も語頭において活用せられてはいるけれども、MP の初期の段階で語根《Wurzel》であったものが合成せられて現在一語——すなわち現在の語根——となっているものについては、語中にその痕跡を残すのみであってもはや固定化してしまっている。先の *čambuk*, *səmpit* に見られる語中の *-mb-*, *-mp-* はそのことを示している。古い MP の語根は *\*buk*, *\*pit* であったのである。このような形態音韻論的な前鼻音化現象の意味的機能が何であったのかは、現在、明らかではない。しかしこれが元来強調を意味したものとすれば<sup>23)</sup>、それは意味的範疇に属する事柄であり、それ自体意味に無関係な個々の単なる音（韻）に対してまでこの現象が行なわれたと考えるのは間違っている。ゆえに、MP *\*alamp* > Bl. *arap*, *\*t'aləmp* > *selap* とすることはできないとすれば、ブリ語の音韻発現の二面性を解釈するために、前鼻音化現象を考慮に入れることは根本的にできないことになる。（前鼻音化現象が強調性にあったということは、同時にそこに使用上の恣意《fukultativ》性<sup>24)</sup>があったということである。事実、先の *čambuk*, *səmpit* には、現在、インドネシア語でその意味的な区別は全くなされ得ないけれども、*čabuk*, *səpit* の形も並立して存在する。）すなわち、先に掲げたブリ語の例、*bəsi*, *suba*, *arap*, *selap* と *pa'at*, *pəs*, *fit* とは同次元的な段階での音韻発現と見ることはできない。ブリ語の現在の個々の音韻は、時期的に異なる複数の言語層の音韻を反映してでき上がっていることは先に述べた。そこには表層語としてのインドネシア（マライ）語があった。一方、基層語（substratum）となった言語は、ポリネシア語的な——MP から現在のポリネシア諸語へ移行する途中の過程の姿を留めるような——言語であった。次に MP 共通祖語の音韻に対するブリ語の表層(表)・基層(基)語の対応音韻、および参考としてインドネシア語派 (IN) を代表させてインドネシア語 (In.)、メラネシア語派 (MN) のフィジ語 (Fi.)、ポリネシア語派 (PN) のサモア語 (Sm.) のそれを示す。<sup>25)</sup>

|     | MP        | Bl.(表) | Bl.(基) | IN : In. | MN : Fi. | PN : Sm. |
|-----|-----------|--------|--------|----------|----------|----------|
| (1) | <i>*p</i> | p      | f      | p        | v, (ʿ)   | f        |
| (2) | <i>*b</i> | b      | p      | b, (p)   | v        | f        |
| (3) | <i>*t</i> | t      | t      | t        | t        | t        |
| (4) | <i>*d</i> | d      | l      | d, (t)   | r        | l        |

23) Dempwolff (1937), II Band, p. 8. Dempwolff は “De Intensieve of Activiteitsvormen in eenige Talen van Indonesië,” *Versl. en Med. Afd. Letterk.*, 4de Reeks, Deel IX, Seite 319ff. における Adriani, N. の説を支持している。

なお、形態音韻論的な現象であるということは、音声学的に二子音連続であっても音韻論的には一音素とみなすべきであるが、本稿ではその部分の明瞭を期するため二子音を掲げてある。ゆえに、本稿の N, V で示す CVCVC の形式についてもその点で注意せられたい。

24) Dempwolff (1937), II Band, p. 7; (1938), III Band, p. 9.

25) 再構された音素に打たれた番号は、泉井久之助 1958. 「マライ・ポリネシア諸語」『世界言語概説』下巻、東京、pp. 1036-1037. に従う。なお、再構音素について泉井教授も原則的には Dempwolff に従っておられる。また、In., Fi., Sm. の対応音素も泉井教授の示されたものを借用させていただく。



|      |     |          |         |        |        |      |
|------|-----|----------|---------|--------|--------|------|
| (5)  | *t  | t        | t       | t      | t      | t    |
| (6)  | *d  | d        | l       | d, (r) | r      | l    |
| (7)  | *k  | k(ʼ, ϕ), | ʼ, ϕ    | k      | k, (ʼ) | ʼ    |
| (8)  | *g  | g        | ʼ, ϕ    | g      | k, (ʼ) | ʼ    |
| (9)  | *tʼ | s        | s       | s      | ð      | s    |
| (10) | *dʼ | j        | l       | j      | ð      | s    |
| (11) | *kʼ | č        | s       | č      | ð      | s    |
| (12) | *gʼ | d        | s       | d, (t) | ð      | s    |
| (13) | *w  | w        | w, ϕ    | ʼ, w   | v      | v, u |
| (14) | *l  | l        | l       | l      | l      | l    |
| (15) | *ɭ  | r        | l       | r      | r      | l    |
| (16) | *y  | y        | ʼ, ϕ    | y      | ð, (y) | ʼ    |
| (17) | *ɣ  | r(ʼ, ϕ)  | ʼ, ϕ    | r      | ʼ, ʼ   | ʼ    |
| (18) | *h  | h(ʼ, ϕ)  | y, ʼ, ϕ | ʼ, h   | ʼ, ʼ   | ʼ    |
| (19) | *m  | m        | m       | m      | m      | m    |
| (20) | *n  | n        | n       | n      | n      | n    |
| (21) | *nʼ | nʼ       | n       | nʼ     | n      | n    |
| (22) | *ŋ  | ŋ        | ŋ       | ŋ      | ŋ      | ŋ    |
| (23) | *a  | a        | a       | a      | a      | a    |
| (24) | *i  | i        | i, e    | i      | i      | i    |
| (25) | *u  | u        | u, o    | u      | u      | u    |
| (26) | *ə  | ə(a)     | ə, u, o | ə, a   | o      | o    |
| (27) | *ʼ  | ʼ, ϕ     | y, ʼ, ϕ | ʼ, ʼ   | ʼ, ʼ   | ʼ    |

(ϕ は語末におけるゼロを表わす。また \*gʼ は語中・語末にのみ現われる。)

この中で MP 共通祖語の再構音素に対してブリ語では同じ対応音素が表層語にも基層語にも現われる場合がある (\*t > t, t; \*l > l, l; …)。そのような場合、表層・基層の区別はどこでつけ得るのか。それは MP の再構形の持つ音節形式に対してそれぞれの変化形の持つ音節形式が異なっていることにより判明する。

#### IV ブリ語における基層語

MP 再構形の音節形式 (原則的に \*CVCVC) から変化した形は、基本的に次のようになる。

MP \*C<sub>1</sub>VC<sub>2</sub>VC<sub>3</sub> > C<sub>1</sub>'C<sub>2</sub>'V ……(i)

> C<sub>1</sub>'VC<sub>2</sub>'(C<sub>1</sub>'VC<sub>3</sub>') ……(ii)

>C<sub>1</sub>'VC<sub>2</sub>'V .....(iii)

(i)：この形式を持ち MP と対応する語は、非常に少ない。*\*puluh* 〈十位の数〉>*flo(-tan)* 〈10〉, *\*banuwa*<sup>c</sup> 〈陸地〉>*pnu* 〈村〉, *\*bulu*<sup>c</sup>>*plu* 〈羽, 毛〉, *\*mata*<sup>c</sup>>*mta* 〈目〉。この形式が現われる音韻的条件は明らかにすることができない。<sup>26)</sup>

(ii)：C<sub>1</sub>'VC<sub>3</sub>' は \*C<sub>2</sub> が Bl. で ' に変化する音素である場合、例えば *\*yakit* は *\*a*<sup>c</sup>*it* を経て Bl. *'at* 〈筏〉となる例において見られる。またそのような \*C<sub>2</sub> をはさむ母音が前後とも同じ母音の場合、母音縮合 (crasis) が起こり音声学的な長母音 [aː], すなわち C<sub>1</sub>'V'VC<sub>3</sub>' が現われる。*\*baɣat* 〈北西モンスーン〉>*pa'a*<sup>c</sup>*t* 〈西〉。ただし、C<sub>1</sub>'VC<sub>2</sub>' の形式においても MP *\*C<sub>1</sub>VC<sub>2</sub>VC<sub>3</sub>* の \*C<sub>2</sub> をはさむ \*V が二個とも \*a の場合、Bl. で一般的に [aː] となるがこの変化は語末の \*-VC<sub>3</sub> を落としたために起こった代償的延長 (compensatory lengthening) によるものである。*\*babah*>*pa'a*<sup>c</sup>*p* 〈下〉, *\*t'alah*>*sa'a*<sup>c</sup>*l* 〈誤り〉。

(iii)：MP *\*C<sub>3</sub>* が \*h, \*, \*y の場合は(ii)の形式となり、それ以外の語末子音が立つ時には(iii)の形式になると大略いえるが、例外は多い。*\*təluɣ* に対して *tolo*, *ta'al* 〈卵〉のように(ii)(iii)の両形ある場合もある。また \*C<sub>2</sub> が Bl. で ' になる音素の場合、原則的に母音縮合が起こり、C<sub>1</sub>'V'VC<sub>2</sub>' が現われる。例えば、*\*dixi*<sup>c</sup> 〈立つ〉>*li'i* 〈柱〉, *\*waka*(!)>*wa'a* 〈根〉, *\*paɣi*<sup>c</sup>>*fa'a* 〈えい(魚名)〉。母音縮合は、また、異母音間にも起こることがある。*\*baɣu*<sup>c</sup>>*po* 〈新しい〉, *\*ləgək* 〈そり返る〉>*lu* 〈身を屈める〉。

このように基層語の音節形式は MP の再構形からは約縮された形でしか存在しないが、MP の語末 *\*C<sub>3</sub>* が \*-m, \*-n, \*-ŋ の場合は、Bl. においてそれを保持している例が多い——すなわち *\*C<sub>1</sub>VC<sub>2</sub>VC<sub>3</sub>*>*C<sub>1</sub>'VC<sub>2</sub>'VC<sub>3</sub>'* であって MP の形式は変わらない——、これはこの三音が比較的变化しにくい音であるため基層語においてその消失が遅くまで徹底しては行なわれなかったこと、さらに、新たな表層語の音韻・音節形式の影響下に入ったためその消失の進行が抑制せられたことによる (VI 1. 参照)。*\*dələm*>*lolo* 〈内〉; *\*ka'an*>*a'an* 〈食べる〉, *\*ənəm*>*wonəm* 〈6〉。

以下に MP 再構音素に対するその他の実例を示す。

(1) *\*p*:*\*pən'u*<sup>c</sup>>*fən* 〈海亀〉, *\*paha*<sup>c</sup> 〈下肢〉>*fi'a* 〈股骨〉, *\*panaw*>*fa'an* 〈行く〉, *\*('ə-)**pat*>*fat* 〈4〉; *\*aɸuɣ*>*yafi* 〈石灰〉, *\*ipun* 〈集める〉>*'if* 〈下に置く〉; *\*('i-)**yup*>*'uf* 〈吹く〉。

ただし、*\*apa*<sup>c</sup>>*'aha'i* 〈何〉は例外である。MP *\*p*>*\*h*>*f* の途中の段階で変化が停止した

26) MP の古い段階には弁別的に機能するアクセントがあり——すなわち、この場合 *\*CVCVC*——その名残りであろうか。そのアクセントとは、現代タガログ語に見られるような stress accent であったろう。ただし、マライ・ポリネシア比較言語学でアクセントが問題にされることはない。共通祖語の再構において諸言語の比較からはアクセントに関する確定的な結果が得られないからである。Dempwolff (1934), I Band, p. 36.

ものの痕跡であろうか (脚注 31 参照)。

(2) \*b : \*buhaya' > piya'i <鰐>, \*ba'u' > pa'u <臭>, \*binay > (ma-)piŋ <女>, \*bunuh > pun <殺す>, \*bu'ah > pi'o <実>; \*ubi' > up <芋>, \*təbu' > top <甘蔗>。

(3) \*t : \*tahu' > to'o <知る>, \*tuḍuḡ (\*tiḍuḡ) > tuli <眠る>; \*matay > mat <死ぬ>, \*kutu' > ut <毛虱>, \*utak <脳> > uta <頭髮>; \*(ə-)pat > fat <4>。

(4) \*d : \*dəŋəŋ > loŋa <聞く>, \*dəpa' > lof <尋<sup>ひろ</sup>>, \*d(d)aŋah <血> > la <凝血>, \*dadəŋ <熱する> > lala <脅かす>, \*dəpət <保つ> > lafa <到る>; \*uda' <若い> > ula <若者>。

(5) \*t : \*tak <叩く音> > ta <サゴ椰子叩きで打つ>; \*puṭik (\*pəṭik) > (a-)fot <摘み取る>。

(6) \*d : \*duwa' > lu <2>, \*danaw > lan(-lan) <湖>, \*daləm > lolo <内>, \*diŋi <立つ> > li'i <柱>; \*uḍan (\*hud'an) > ulan <雨>, \*uḍəŋ (\*hudəŋ) <甲殻類> > ulaŋ <海老>, \*t'əḍəŋ <中間の> > salaŋ <丁度> (VI 4. 参照), \*tuḍuḡ (\*tiḍuḡ) > tuli <眠る>。

(7) \*k : \*ka'an > a'an <食べる>, \*kutu' > ut <毛虱>, kayu' > a'i <木>; \*k'ukil <掻き立てる> > su'i <のみで切り取る>, \*yakit > ət <筏>, 'aku' > i <私>; \*mat'ak > masa <煮えた>, \*puk'uk <尖端> > (fo-)fo'as <潰瘍>。

(8) \*g : \*guluŋ <転がる> > olol <巻く> (VI 4. 参照), \*ləgak <そり返る> > lu <身を屈める>。

(9) \*t' : t'alah > sa'al <誤り>, t'uluh <松明> > salo <樹脂>, \*t'it'il > sa'i (sise'i) <櫛>, \*(ə-)t'a' > sa <1>; \*hat'ap > (mama-)ya'as <煙>, \*yut'uk <'usi <肋骨>, \*t'ut'u > sus <乳>; \*(ti-)pit' > (mli)fis <薄い>。

(10) \*d' : d'a'uh > la'u <遠い>, \*d'alan > laliŋ <道> (VI 4. 参照); \*tud'uk <示す> > tul <輝く, 照る>, \*(ta-)d'im > (mda-)lim <鋭い>。

(11) \*k' : \*k'ukil <掻き立てる> > su'i <のみで切り取る>, \*(k'ə-)k'ak > su'a'a <とかげ>。

(12) \*g' : \*(')ag'an > (ng-)asan <名>, \*ug'inŋ > (us)usaŋ <木炭>, \*pig'a' > fis <いくつ, いくら>。

また \*ig'unŋ (\*ug'unŋ) <鼻> に対して Bl. gugu'o は当たらないが, 南ハルマヘラの Gani 語は 'usnut, Kajoa 語は 'usnod でありこの s は \*g' に当たるものであろう。[ミクロネシアのパラウ語 isŋék <鼻=私の (-ék) 鼻 (is-)(-ŋ- は渡り音)> 参照。]

(13) \*w : \*wayəŋ > waya (wa'i) <水>, \*waka(i) > wa'a <根>, \*walu' > wa'i <8>, \*wayi' (\*adaw) > wo'ol <日, 太陽>; \*duwa' > lu <2>, \*banuwa' <陸地> > pnu <村>, ただし, \*t'iwa' > siwi <9>; \*danaw > lan(-lan) <湖>。

(14) \*l : \*lima' > lim <5>, \*layəŋ > (fa-)la'i <帆>, \*lubaŋ > lop <穴>; \*alap > ya'al <取る>, \*təlu' > tol <3>, \*təluḡ > tolo (ta'al) <卵>, \*hiliŋ > yeli <下流>。

(15) \*l : \*lapuh (lapak) <壊す> > laf(-laf) <血を流す>, \*labu' <総<sup>ふさ</sup>> > lapo <縁<sup>ふち</sup>>; \*t'ulup <侵

入する>>solat <入り込む> (Ⅵ 4. 参照)。

(16) \*y: kayu' <'a'i <木>, \*wayaɣ > wa'i <水>, \*layaɣ > (fa-)la'i <帆>; \*matay > mat <死ぬ>。

(17) \*ɣ: \*ɣakit > 'ət <筏>, \*ɣut'uk > 'usi <肋骨>; \*baɣu' > po <新しい>, \*baɣu' <ハイビスカス> > pa'i <花名>; \*dəŋəɣ > loŋa <聞く>, \*tuɖuɣ > tuli <眠る>, \*tiɣəm > (si-)si'am <牡蠣> (ただし、語頭音は不規則)。

なお、\*ɣumah <家> は Bl. でそれに当たる語はないけれども ('eba'i <家>), Gani 語で 'umはその対応形。なお、Bl. ruma <家> は表層語 (Ⅵ 1. 参照)。

(18) \*h: \*hud'an > 'ulan <雨>, \*'hat'ap > (mama-)ya'as <煙>, \*huɖaŋ > 'ulaŋ <海老>, \*'hatay > yata'i <肝> (Ⅵ 4. 参照); \*paha' <下肢> > fi'a <股骨>, \*tahu' > to'o <知る>; \*d'a'uh > la'u <遠い>, \*bu'ah > pi'o <実>, \*'ayah <父> > 'aye'e <お母さん(呼掛け語)>。

(19) \*m: \*manuk > mani <鳥>, \*matay > mat <死ぬ>; \*lima' > lim <5>; \*ɖaləm > lolo <内>, ただし、\*'ənəm > wonam <6>, \*(ta-)d'im > (mda-)lim <鋭い>。

また、Bl. ma'an <人> は MP 共通語彙ではないがミクロネシアのトラック語 muan <人> と対応し、再構形として \*ma'an を与えることができる。<sup>27)</sup>

(20) \*n: \*nanah > nan <膿>, \*nut'a' > nus <島>; \*bunuh > pun <殺す>; \*ka'ən > 'a'an <食べる>。

MP \*(i-)num <飲む> に対する Bl. は dom である。\*n > d は例外となるが、北ハルマヘラの Galera 語は udo, Loda 語は udomo である。これらの言語の影響によるものかと思われる。

(21) \*n': \*'an'am > yanam <編む>, \*pən'u' > fən <海亀>。

(22) \*ŋ: \*dəŋəɣ > loŋa <聞く>; \*bubuŋ > pupuŋ(-an) <屋背> (Ⅵ 4. 参照), \*huɖaŋ > 'ulaŋ <海老>。

(23)(24)(25)(26)の各母音については、不規則な変化も多いけれども、だいたい、これまでの例をもって充当することができるであろう。

(27) \*': \*'atəp > yataf <葺き屋根> (Ⅵ 4. 参照), \*'alap > ya'al <取る>, ただし、\*'ikan > 'i'an <魚>, \*'uɖan > 'ulan <雨>, \*'ənəm > wonam <6>。

なお、MP \*'at'in <塩>, \*(m)amit' <甘い>, \*'abu' <灰> に対して Bl. はそれぞれ gasi <塩辛い>, gamis <甘い>, (gi-)gi'ap <灰> である。MP \*' が Bl. g になるのも全体の語彙から見れば例外的である。北ハルマヘラの大部分の言語に見られる gâte<肝><sup>28)</sup> は MP \*'atay と関連があるとすれば、Bl. この現象は北ハルマヘラの言語からの影響であろうか。ミクロネシアの

27) Izouï, H. 1941. "Un coup d'œil sur la langue ts'ü:k," 『言語研究』第7/8号, p. 44.

28) Hueting, pp. 394-395.

チャモロ語でもこのような添加音 g-(脹音《Blählaut》) が現われることが多い。<sup>29)</sup>

さて、先の音韻対照表によって明らかなように、ブリ語の基層語は MP の (4) \*d (6) \*ɖ (14) \*l (15) \*! の四つの音韻についてその発現に何らの区別を設けないということである。すなわち、それらはすべて l となって現われる。この四つの音韻が合一して一つの音韻になっているのは、ポリネシア諸言語にのみあまねく見られる現象であり、この現象によってポリネシア語派を他の語派と分かつ根拠とすることができる。<sup>30)</sup> このようにブリ語の基層語となった言語はポリネシア語的な特質を既に備えた言語であったけれども、まだ完全なポリネシア語ではなかった。特に、ポリネシア語派のみならずメラネシア語派において対立の失われている (1) \*p (2) \*b, (7) \*k (8) \*g の区別のうち、ブリ語は \*p と \*b の対立を残している点では古風である。<sup>31)</sup> ただし、(17) \*ɣ に対してポリネシア・メラネシア諸言語と同じく、 $\phi$  (あるいは、非子音的な Jakobson のいわゆる glide 音、 $\text{ʔ, ʕ}$ )<sup>32)</sup> にしている点では共通している。この現象は、インドネシア諸言語にあっては稀有で特異な事柄である。

このようなポリネシア語的音韻変化が完全に遂行され得なかったのは、その変化の進行中に新たな表層語としてのインドネシア語がおおいかわさったためであると考えられる。

## V ブリ語における表層語

表層語の音節形式は、MP 再構形の音節形式に対して原則的に次のようになる。

MP  $*C_1VC_2VC_3 > C_1'VC_2'VC_3'$  .....(iv)

$> C_1'VC_2'V$  .....(v)

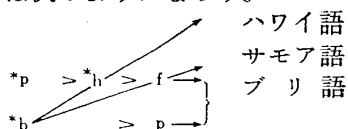
(iv) は MP の形式をそのまま引き継いでいるが、逆にいえば MP の再構形はインドネシア諸語の比較によって基本的には立てられている。さらに、基層語の(ii)に見られたような約縮を行なわないことが特徴である。

(v) この形は基層語の(iii)と同形であるが、MP 祖語に対する関係は全く異なっていることに注意しなければならない。すなわち、(v) は MP  $C_3$  が \* $\text{c}$  の時に限って現われるのであり、(iii) は \* $C_3$  が \*h, \*y, \* $\text{c}$  以外の子音である時にこの形を取るのである。

29) 泉井(1958), p. 1037, p. 1066; 泉井久之助 1949. 「ミクロネシア(内南洋)諸語分布の過程」『比較言語学研究』, 東京/大阪, pp. 7-10. 泉井教授はこの脹音現象をかつてこの地域に存在していた基質的な言語層を想定させるものとしておられる。この言語が何であったかは今のところ不明であるにしても、いわゆるパプア語に属する北ハルマヘラの諸言語の精密な研究が行なわれる必要がある。

30) Dempwolff (1937), II Band, pp. 190-193.

31) \*p, \*b はサモア・トンガ語で f, ハワイ・ラバヌイ語で h に合一している。音韻史的に図式化すれば次のようになる。



ブリ語における例外的な \* $\text{c}$ apa' >  $\text{c}$ aha'i <何> は古音が保持された例であろう。

32) Jakobson, R., Fant, C. G. M., Halle, M. 1961. *Preliminaries to Speech Analysis*. Massachusetts. p. 19.

その例についてはⅡにおいて示したが、それらの例がすべて忠実にインドネシア語的な (iv) (v) 形を保持しているのは、漸次的に及んだインドネシア語の語彙の中でも新しい時期に属するものであり、以下に述べるような表層語において例外的な形式を持つものは、基層語の変化の進行中におおいかぶさった際の古い時期に属するものといえよう。

既にⅢにおいて述べたように MP には前鼻音化現象がある。この現象は MP 共通祖語の初期の段階から既に存在していたのではなく比較的后期になって一般化したのであるが<sup>33)</sup>、ブリ語は基層語においてそうであったのみならず、また表層語においてもこれを知らない。<sup>34)</sup> おそらく MP から分出した初期のインドネシア語においても、この現象は現在のように徹底しては行なわれていなかったのであろう。ブリ語にかぶさったインドネシア語はそのような古いインドネシア語であった。(そのような言語的守旧性はブリ語の若干の語彙においても見られる。MP 諸言語で現在、語根となっているものは、古くはさらにより小さな語根の集まりであったことを示す例として bo'u <豚>; lit <貼りつける>; gok(gok) <烏> などからインドネシア語の babi <豚>; palit <膏藥>, lilit <巻きつく>, bəlit <曲り>; gagak <烏> などの語も根元的には -bi, -lit, -gak が語根であったことが知られる。)

かつての語根同志が結合して新たに一語を作る場合、その間に全く前鼻音化現象が行なわれていないブリ語の例を現代インドネシア語と対照して示す。

ja'ji <約束>: jan'ji, pa'ji <旗>: pan'ji, ku'ci <鍵>: kun'ci, naka <波羅蜜>: naŋka, samaka <水瓜>: səmaŋka, rate <鎖>: ranta'i, bala'ja <出費>: bəlan'ja, tadu(tado) <角>: tanduk, putiana <女の妖怪>: puntianak, muta <吐く>: muntah, suba <敬意>: səmbah, sibu <燈心>: sumbu, gugim <握り拳>: gəŋgam, 'ade <例>: 'anda'i.

なお、サンスクリット借用形にまでこの形式が及んでいるのは、類推によるのであろう。

čapaka <金厚朴>: čəmpaka。ゆえに tabaga <銅>: təmbaga には異分析 (metanalysis) による誤りがある。

また、より新しい時期に属する語彙はⅡの例で分かるように ('untuŋ, lon'ceŋ,……) インドネシア語と全く同形である。ただし、そのようなインドネシア語の影響下にあって、次の例はインドネシア語では語中の前鼻音化現象は見られないけれども、ブリ語で独自に、恣意的に行なわれた痕跡である。

(ka-)laŋku(-an) <態度>: (ke-)laku(-an), piŋkul <重量の単位>: pikul, gandiŋ <肋材>: gadiŋ。

33) 泉井久之助 1949. 「仏印のチャム語について」『比較言語学研究』, 東京/大阪, pp. 128-129.

34) ただし、現代ブリ語において語頭音が t- の場合、それに接頭辞がつくと、時々 <soms>, n- に鼻音代償を起こして変化する。tət <小橋>, af-nət <小橋を行く>。この現象は t- 以外の子音にまで及ばないけれども、表層語としてのインドネシア語の現象 (鼻音増加: b-~mb-, d-~nd-, g-~ng-, j-~n'j-, č-~n'č-; 鼻音代償: p-~m-, t-~n-, k-~ŋ-, s-~n'-) の一部の影響を受けたのであろう。しかし、現在のインドネシア語の語頭における強制的な現象とは異なって、ブリ語の場合、あくまで恣意的・時々、である。Maan (1951), p. 23, pp. 26-27.

表層語には以上のほか、次のような音韻発現上・形式上におけるだいたいの傾向を指摘することができる。

1. インドネシア語のəは他の母音(a, e, i, o, u)に変える。ただし、その変え方は不規則。  
barani〈勇敢な〉: bərani, tarima〈受ける〉: tərima, padati〈荷車〉: pədati, sabe'a〈祈る〉: səmbah, pitua (A)〈説諭〉: pətua, sosai〈後悔〉: səsai, tulada〈見本〉: təladan, birahi (S)〈快い〉: bərahi, sutara (S)〈絹〉: sutəra。

2. b- を w- に変えることがある。

wača〈読む〉: bača, walira〈硫黄〉: bəleraŋ。ゆえに, walanda〈オランダ〉: bəlanda においても。

3. 語頭音節脱落 (aphaeresis) の現象。

ŋamo〈暴れ狂う〉: məŋamuk, riča (S)〈胡椒〉: məriča, kayat (A)〈物語〉: hikayat, slam (A)〈回教徒〉: 'islam, lahatala (A)〈最高の神〉: 'allah ta'ala。

4. 語音転倒 (metathesis) の現象。

'olat〈海〉: la'ut, sispe〈さし込む〉: sisip, jiriki (A)〈生計〉: rəjəki, durakan (S)〈反逆〉: durhaka。

また、この現象はポルトガル語からの借用語にも現われる。jalena〈窓〉(Port. janela), makse〈たとえ……でも〉(Port. masque)。

## VI 表層語と基層語との相互干渉

ブリ語における表層語と基層語との区別は、だいたい以上のような音韻およびそれと関連しての音節形式によってつけることができる。しかしそのような表層・基層の関係は、一方の変化が完全に停止したところに他方がはいつてきたというわけではなかった。基層語における音韻変化の進行中に、これもやはり進行中の変化を持った表層語がかぶさったのである。ここにブリ語の両者によって相互に干渉し合い、影響を与えられつつ形成せられていったことが原因となる音韻・音節形式の、一見例外的で複雑な発現を引き起こすことになった。

### 1. 基層語から表層語への音韻の影響

MP 再構音素 \*k, \*h, \*ɣ は基層語で ʔ, φ になるが、この変化が表層語にも及ぶ。また語末の \*-m, \*-n, \*-ŋ は基層語においてその行なわれ方は不徹底であったように、表層語の影響によって保持される傾向が強く残ったと同時に、消失(すなわち, φ)することが本来の原則でもあった。この現象は逆に表層語の一部の語彙に適用せられている。以下の例の: の後はインドネシア語である。

'u'at〈強い〉: ku'at, bebe〈家鴨〉: bebek, tasi〈海水〉: tasik, čero〈湯沸し〉: čerek, ba'ci  
……ba'ci〈……も……も〉: ba'ik……ba'ik; 'ulu〈始め〉: hulu, 'ala〈征服する〉: 'alah, 'arap

〈望む〉: harap, gaja (S) 〈象〉: gajah, ruma 〈家〉: rumah, susa 〈難儀〉: susah, ta<sup>u</sup>n 〈年〉: tahun; <sup>u</sup>amas 〈サゴ椰子を絞る〉: ramas, sumu 〈井戸〉: sumur, kelo 〈山葵〉: kelor, kobo 〈水牛〉: kərba<sup>u</sup>, badagan 〈商う〉: bərdagan, pasagi 〈四角の〉: pərsəgi.

<sup>u</sup>uku (A) 〈酋長への称号〉: hukum 〈法〉; paseba 〈集会所〉: paseban (ジャワ語), waraŋa 〈砒素〉: waraŋan, jara 〈馬〉: jaran (ジャワ語); da<sup>u</sup> 〈漕ぐ〉: dayuŋ, kači 〈ボタン〉: kan<sup>u</sup>-čiŋ, guti 〈鋏〉: guntiŋ, tango 〈堪える〉: tanguŋ, tuka 〈職人〉: tukaŋ.

## 2. 基層語から表層語への音節形式の影響

基層語の音節形式(iii)に見られる開音節 (open syllable) は、ポリネシア諸言語に一般的に現われる音節構成法である。このような CVCV(CV) 化への傾向が、上に掲げた 1. の場合にも作用していたとすれば——語末音脱落(apocope)——, 次のように語末音添加(epithesis), 語中音添加(epenthesis) によって開音節化しようとする傾向もまた存在する。

nanasi 〈パイナップル〉: nanas, sababe (A) 〈理由〉: səbab, arababu (A) 〈胡弓〉: rəbab; warana (S) 〈色〉: warna, soroga (S) 〈天〉: surga, paraləte 〈怠惰者〉: pərlintih, baraguna (S) 〈有益な〉: bərguna.

## 3. 表層語から基層語への音韻の影響

ブリ語において, 例えば pəs 〈粉碎する〉, yap 〈火〉は MP \*pək<sup>u</sup>ah, \*<sup>u</sup>apuy に由来し, またその音節形式もこの場合基層語として規則的に(ii)となっている。しかし, MP \*p は基層語的には f に変化するから, 期待される形としては \*fəs, \*yaf (または \*ya<sup>u</sup>af) でなければならない。これは表層語としてのインドネシア語が pəčah, <sup>u</sup>api をもたらしたため, 基層語としての元の音節形式はそのままにしておいて新たな音韻のみをそれと交換せしめたからであると考えられる。同様の例は, \*tubuh 〈生長する〉>tub 〈生きる〉: tumbuh, \*dalih>da<sup>u</sup>al 〈口実, 弁解〉: dalih, \*k<sup>u</sup>agak 〈突支棒〉>sagi 〈二股になった〉: čagak 〈二股棒〉においても見られ, それぞれ \*tup, \*la<sup>u</sup>al, \*sa<sup>u</sup>i (または \*sa<sup>u</sup>a) とはならなかった。

## 4. 表層語から基層語への音節形式の影響

表層語の影響力の増加とともに, その音節形式 CVCVC も一般化していったが, 一方で基層語的音韻変化もまだ完全に停止することなく行なわれていた。このように考えることによって, \*panat<sup>u</sup>>fanas 〈熱い〉, \*balət<sup>u</sup> 〈報いる〉>palas 〈払う〉が説明でき (それぞれ \*fa<sup>u</sup>an, \*pal とはならなかった), インドネシア語の panas, balas の音節形式に従ったのである。同様に, \*pulət<sup>u</sup>>fulas 〈回転する〉: pulas, \*t<sup>u</sup>ədaŋ 〈中間の〉>salaŋ 〈丁度〉: sədaŋ, \*<sup>u</sup>hatay>yata<sup>u</sup>i 〈肝〉: hati, \*bubuŋ>pupuŋ(-an) 〈屋背〉: bubuŋ, \*<sup>u</sup>atəp>yataf 〈葺き屋根〉: <sup>u</sup>atap, \*t<sup>u</sup>a<sup>u</sup>əp 〈落下する〉>selap 〈切り倒す〉: sarap 〈落ちたもの, 塵埃〉, \*k<sup>u</sup>aŋkul>saŋkol 〈鋏〉: čaŋkul などもその例とすることができる。

なお, 次のような語の語末に現われる -ŋ, -n, -l は, MP 諸言語に対する現われ方が全く不



規則的でありその対応例を見出すことができない。しかし 1. で見られた例のようにいったん語末子音を  $\phi$  にしたものに、再び表層語の音節形式(CVCVC)に従わせるため新たに語末子音を回復させたことが、このような混乱を招いたのであろう。 $*gulu\eta$  〈転がる〉 $>^{\circ}olol$  〈巻く〉: $gulu\eta$ ,  $*d'alan$  〈道〉: $jalan$ ,  $*kabi\eta$  〈山羊〉: $kambi\eta$ ,  $*daga\eta$  〈商う〉: $daga\eta$ ,  $bi\eta ul$  〈混乱した〉: $bi\eta u\eta$ 。また  $*bantu$  〈助ける〉: $bantu$  の  $-\eta$  は剰音が発生(anaptyxis)したものであって、同じく語原とは関係がない。

ただし、ブリ語の語末子音が不規則的に現われることがある。 $*t'ulup$  〈侵入する〉 $>solat$  〈入り込む〉: $surup$  (ジャワ語),  $*udud$  〈喫煙する〉 $>udup$  〈煙管〉: $udut$  〈喫煙する〉,  $sayap$  〈切り刻む〉: $sayat$ ,  $sijur$  (A) 〈屈む〉: $sujud$  ( $sujut$ )。

## Ⅶ ブリ語の文法現象

ブリ語の基層語は、一部不徹底ながら確実な音韻現象の根拠によってポリネシア語的な姿を持った言語であることが明らかになったが、文法現象についてもそのような基層語の本来具有していた一つの特徴を指摘することができる。マライ・ポリネシア諸語を語派に分類する根拠として、その所有代名詞の用法があげられる。

例えばインドネシア語で〈私(君、彼)の頭(家、米)〉という場合、所有者と被所有者(物)との間の関係はすべて対等であり、被所有者(物)間にも何らの区別がなされない。

$k\acute{e}pala$  (rumah, beras)  $\acute{a}ku$  (kamu, di'a).

( $\acute{a}ku$ , kamu, di'a は接尾辞的所有代名詞  $-ku$ ,  $-mu$ ,  $-n'a$  を用いて  $k\acute{e}palaku$ , ……としてもよい。)

しかしブリ語ではこのような被所有者(物)の種類に従って厳密に所有代名詞の使い分けが行なわれる。<sup>35)</sup> ここでは単数形の場合のみを示す。

### 1. 体の部分、血族に対する場合。

$boboko$  〈頭〉に対して  $yabobokok$  〈私の頭〉,  $\acute{a}bobokom$  〈君の頭〉<sup>36)</sup>,  $\acute{i}boboko$  〈彼の頭〉となる。

### 2. 物(家・舟など)、道具(ナイフ・衣類・武器など)に関係する場合。

$\acute{e}ba'i$  〈家〉に対して  $yanik$   $\acute{e}ba'i$  〈私の家〉,  $\acute{a}nim$   $\acute{e}ba'i$  〈君の家〉,  $\acute{i}ni$   $\acute{e}ba'i$  〈彼の家〉となる。1. で見られた  $ya$ …… $k$ ,  $\acute{a}$ …… $m$ ,  $\acute{i}$  が  $ni$  という属格指示辞《genitiefaanuider》(＝英語 of)と結合して一つの所有代名詞形となっている。ただし、 $ni$  のみで〈彼の〉を表わすこともある。

35) Maan (1951), pp. 52-56.

36) 一、二人称に見られるこのような不連続的形態素(discontinuous morphemes)は、別に特異な現象ではない。グアテマラの Kekchi 語にも同じく所有代名詞に関してそのような形態素がある。Ni-da, E. A. 1961. *Morphology*. (2nd ed.) Ann Arbor. pp. 49-51.

3. 食料品、飲料品、煙草などに関係する場合。（ただし、体の部分名の中で *ləfləfan* 〈眉、眉毛〉のみは例外で 3. にはいる<sup>37)</sup>）

*piŋe* 〈米〉に対して *yanak piŋe* 〈私の米〉, *‘anam piŋe* 〈君の米〉, *‘ina piŋe* 〈彼の米〉となる。この場合の指示辞は *na* である。<sup>38)</sup> また, *na* のみで〈彼の〉を表わすことがある。

このような被所有者(物)間に類を立ててそれを峻別する所有代名詞の用法は、インドネシア語派に属するすべての言語に見られない現象である。<sup>39)</sup> 所属関係における本具的と所管的の区別は、各言語において若干の分類・用法の相違はあるにせよ、メラネシア語派のすべての言語できびしく行なわれている（例えば、フィジ・キリウィナ語は4種別<sup>40)</sup>、ナウル語は3種別<sup>41)</sup>）。しかしメラネシア語の場合、それぞれ類別せられた被所有者（物）に対して形態的に異なった独立の所有代名詞形があるのに対し——母音交替《Umlautung》的である場合が多い——、ポリネシア語派に属する言語においてはインドネシア語で見られたように人称代名詞の独立形（*‘aku*, ……）が所有代名詞としてもあらゆる被所有者（物）について用いられ、その類別は2種類の属格指示辞 *a*, *o* によってしかなされないことである。例えば、サモア・ハワイ語などがそうである。<sup>42)</sup> (Milner<sup>43)</sup> はサモア語のそのような区別が所管的 (control), 非所管的 (lack of control) によるであろうことを示唆している。) ポリネシア語は一般的に独立の所有代名詞はなく属格指示辞 *a*, *o* によって2種の類別をする点に特色がある。とすれば、ブリ語の場合、一見その構成法においてメラネシア語に近い姿を保ちながらも 2. 3. の例で見られたようにそこに現われる *ni*, *na* という同じく属格指示辞の存在は、ポリネシア語の現象と機能的に共通したものをうかがわせるのである。<sup>44)</sup> メラネシア語の所有代名詞形には原則としてこのような属格指示辞は関与しない。

ブリ語は以上のように文法現象の基本的構成法においても、基層語となった言語がポリネシア語的な言語であることを明らかに示している。

37) Maan (1940), p. 54. の *ləfləfan* の項目に出ている *yanik ləfləfan* 〈私の眉〉は, *yanak ləfləfan* の誤り。

38) *ni*, *na* の独立的用法としての区別は, Maan (1951), pp. 32-33. 参照。

39) 泉井(1958), pp. 1029-1035.

40) Churchward, C. M. 1941. *A New Fijian Grammar*. Sydney. pp. 26-29; Malinowski, B. 1966. *Coral Gardens and Their Magic*. Vol. II. The Language of Magic and Gardening. (2nd ed.) London. pp. 182-187.

41) Hambruch, P. 1914. *Die Sprache von Nauru*. Hamburg. pp. 40-43.

42) Marsack, C. C. 1962. *Teach Yourself Samoan*. London. pp. 48-51; Elbert, S. H., Keala, S. A. 1961. *Conversational Hawaiian*. Honolulu. pp. 48-55.

43) Milner, G. M. 1963. "Notes on the Comparison of Two Languages (With and Without a Genetic Hypothesis)," *Linguistic Comparison in South East Asia and the Pacific*. London. pp. 41-42. また彼は4種別のフィジ語, 2種別のサモア語の相互関係についてその分類法上の平行性をも指摘している。

44) MP 共通祖語の属格指示辞として \**n* が再構せられる。泉井 (1958), p. 1058.

ハワイ語ではこの \**n* が, *a*, *o* と結合して *na*, *no* ともなり同じく属格的に現われることがある。Pukui, M. K., Elbert, S. H. 1961. *Hawaiian-English Dictionary*. (2nd ed.) Honolulu pp. xix-xx.

## お わ り に

ブリ語は一見インドネシア語に近い言語のように見え、これをインドネシア語派に属する一言語のように考えた人もいた。しかしブリ語におけるインドネシア語的なものを表層語として取り除くと、後にはインドネシア語とは異なった真に本質的・基質的なもの、すなわちポリネシア語的な姿が現われてくる。それはブリ語の基層語となった言語である。ブリ語はマライ・ポリネシア語族に属する言語であることは明らかである。しかし、チャム語<sup>45)</sup>・パラウ語<sup>46)</sup>などと同じくこの言語も重層語《une langue à double couche》としなければならない。

ここに一つの仮説が許されるならば、いわゆるオセアニア語（メラネシア・ポリネシア諸言語）はその分布の過程においてハルマヘラ島を通過したのではなかろうか。（さらに古いこの言語の故地としては、アジア大陸内陸部説にいちおう従っておく。）現在のハルマヘラ島北部に見られるパプア語は、既にそれ以前からこの地に定住していた民族の言語の名残りであろう。ハルマヘラ島は、現在、インドネシア、メラネシア・ポリネシア各語派の接点となっているが、ここがそのような民族移動の要となったことは、その地理的位置からしても想像に難くない。また、ポリネシア語に特徴的な音韻現象（特に、\*d,\*ḍ,\*l,\*! の同一化）はブリ語に見られたように、既にハルマヘラ南部において醸成せられていた。ただし、音韻・文法現象から見て、それ以前に現在のメラネシア語族は既に分出を終えていたであろう。そのようなポリネシア語を持った民族は東の現在の地へ、あるいは一部は南へと拡散していった。<sup>47)</sup> しかしブリ語となるべきその前身的言語は、その変化の途中において、既にマライ・ポリネシア共通祖語から分派し北方・西方にあってインドネシア語派を形成していた言語からの新たな振り返りを漸次的に受けてゆき、それは表層語となって、基層語との間に相互影響を繰り返しつつ今日あるようなブリ語が形作られていったと考えられる。

45) 泉井(1949), pp. 115-144; 泉井(1958), pp. 1015-1016.

46) 泉井(1958), p. 1037.

47) Аракин, В. Д. 1965. *Индонезийские Языки*. Москва. pp. 46-47. においてパウロヒ (Паулохи) 語の MP 共通祖語への対応音素が掲げてある。それによると \*l,\*!,\*d,\*ḍ > 1 であってやはりポリネシア語的な特徴を備えている。しかし彼は実例による根拠を与えていない。パウロヒはモルッカス諸島中央部にあるセラシ (Seran) 島の一地名で、Salzner (1960) の分類ではその言語名は出ていないが、インドネシア語派東インドネシア語群の西セラシ諸語に属することになる。